

まほろば宮下会長のルーツ案内記

福島復興から日本の立て直し探訪

近江編 後編②

会津から
後へ
近江

その10

旅の案内人：神奈川県在住

大橋 しのぶ

前回までのあらすじ

二〇一五年五月、まほろばの宮下会長と母方の先祖が同じ福島県・会津若松市である事が分かり、ルーツ探しのお手伝いをさせて頂いた。探さずにはなりました。七月、福島県二本松市で講演会をされるといふ奥様の日程に合わせて福島入りをし、ご夫妻に会津若松等をご案内致しました。そして九月には琵琶湖のほとりにある近江商人発祥の地である日野町を訪れ、日野（近江）商人記念館や川田神社等にご案内しました。

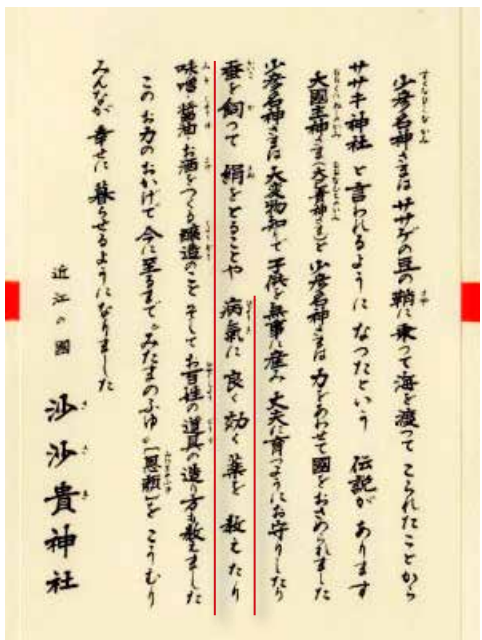


宇多天皇から佐々木源氏へ

さて、川田神社のある甲賀市から新幹線に乗る米原駅に行く途中、近江八幡市を通り過ぎました。この地には沙沙貴神社（ささきじんじや）という古刹があり、佐佐木大明神が祀られています。沙沙貴神社は佐々木源氏の氏神であり佐々木氏発祥の地と言われています。
この神社も宮下会長のルーツの地になりますので、四年前に川田神社の次にご案内した場所でした。

まほろばの社員であった佐々木信豪さんは、後日宮下会長から沙沙貴神社の話聞いて、関西に往くと必ず、ここ沙沙貴神社に詣でられるようになったそうです。この方もきつと何かしらこの地で宮下会長のご先祖様達とご縁のあったお一人なのでしょう。

この沙沙貴神社の御祭神である少彦名命は神代の頃、海を越えてやって来て、お酒造りや味噌・醤油などの発酵食品の作り方を人々に伝えたとされる神様です。近くに発酵とご縁のある「菌（くさびら）神社」がある事や寺田本家発祥の地である



ビックリ！！少彦名命は神農の子！！

『富士古文書（宮下文書）』には、日本人は神農の子孫とあり。農業や諸々の産業技術を伝えたとあり、ここでも繋がっていたのでしょうか！！！！ 宮下と倉田両家は元々、繋がっていたのかもしれない。



少彦名神…病気に良く効く薬を教えたり、味噌・醤油・お酒を造る醸造のこと、そしてお百姓の道具の造り方を教えました。





佐々木信豪さん（まほろば地下「無限心」にて）

日野がある事も偶然ではないように感じます。歴史的に言うくと、朝鮮から帰化した百済人達が発酵技術を持ってきたと説明版に書かれています。

私も以前から何となく少彦名さんには不思議な親しみを感じています。

さて、会津若松の検断（大庄屋）であった倉田家に江戸時代から伝わる『家譜考 壱』によると、倉田家の先祖について下記太字のように記されています。

倉田（宇多源氏佐々木氏支流）家譜に曰く、佐々木太郎左衛門尉定綱の子山中十郎頼定八代の孫、内記定為、本国甲賀郡の住す。時に室町將軍亂に遭て面して甲賀郡に入る叛臣の武士等競い襲う。此時定為五箭を以て五騎を射つ、敵を退け將軍之を奇として曰く。是正に蔵田明神の化



宇多天皇の肖像と自筆「周易抄」



現なり。故に号を倉田と賜ひ、五箭を家紋として、以つて焉を賞でる。内記が射る所の大弓は明神の社内に納と云。

昭和四六年に倉田秀治・元治兄弟によつて発行された『倉田氏家譜』ではこの内容をさらに詳しく検討しています。それによると、倉田家は宇多天皇を祖とし、やがて佐々木氏に改姓、定為の時に甲賀郡に住まうようになったと記されています。

九代將軍足利義尚が、近江国守護であった六角高頼を攻める乱があり、その際、定為は將軍に味方をし、定為が五箭（五つの矢）をもって五騎を射ち敵を退散させた。將軍はこれを喜び、まるで倉田明神の化身のようだと讃え、倉田の姓を賜り、五箭を家紋とする事を許された。そして定為の使つた大弓は倉田明神に奉納された。

『家譜考 壱』と『倉田氏家譜』を総合的に点検すると、宇多天皇を祖とする倉田家の系図の概略は次の通りです。

人王五十九代

① 宇多天皇

← ② 敦実（賜源氏姓？）

← ③ 雅信（賜源氏姓）

← ④ 扶義（参議・近江守護）

← ⑤ 成頼（佐々木祖住江州佐々木・從四位下兵庫介 号 江国寺）

← ⑥ 義経（從四位下兵部大夫 初章経号国光寺）（兵部丞 近江守近江総追捕 從五位下）

← ⑦ 経方（源次大夫、兵庫助 佐々木宮神職）

← ⑧ 為俊（季定）

← ⑨ 秀義（源義朝の甥・頼朝を助け平氏と戦う。伊豆国にて軍功を挙げらるも討死）

← ⑩ 定綱（父・三兄弟と共に活躍。特に弟・高綱は宇治川の合戦で有名。源義経と共に木曾義仲を打ち破る）

- ← (11) 頼定 (山中十郎)
 - ← (12) 秦定
 - ← (13) 基定
 - ← (14) 秦基
 - ← (15) 清定
 - ← (16) 定俊
 - ← (17) 綱定
 - ← (18) 定為 (倉田為始祖 山中内記)
 - ← (19) 定美 (倉田新右衛門)
 - ← (20) 為実 (称 倉田新右衛門
薙髪之後号道裕
法諱、建新院光専道裕居士
葬地正覚山 阿弥陀寺
謚家常彦神霊)
- 簡単に説明しますと、倉田家の家系は宇多天皇を祖とし、二代目もしくは三代目雅信で源氏姓を賜り臣下となり、五代目成頼の時に佐々木に

住まいした事により佐々木を名乗るようになりました。そして十一代目頼定で山中姓となり、十八代目定為で室町將軍より倉田姓を賜り倉田を名乗るようになったという事になります。

宮下会長は幼い日に母方の御祖母様から、「倉田家は宇多天皇を祖としていて、一族にはあの義経や乃木將軍がいたのだよ。」と聞かされていたそうです。家系図も伝わっていたそうですが、残念な事に何かの法事の際に紛失してしまったそうです。

宮下会長はお母さまを早くに亡くされた事もあり、特に母方の家系調査をする事もなく近年まで過ごされてきたそうですが、今回のルーツ調査で倉田家の家系が本当に御祖母様の口伝の通り、宇多天皇を祖とする家柄で乃木將軍も一族の方であったと知って大変驚かれていらつしやいました。

私が個人的に驚いたのは十代目の定綱が源頼朝を助け木曾義仲を追捕していた事です。特にその弟の佐々木高綱は宇治川の合戦で大活躍をして木曾義仲を打ち破りました。私の

会津・樋口家の祖は樋口次郎兼光といい、木曾義仲の四天王の一人ですので、この時代は宮下会長のご先祖である佐々木兄弟と戦っていた事になりますね。時代は数百年下り、幕末の会津ではご先祖様は共に鶴ヶ城に籠城して西軍と戦っています。そして現代ではご一緒にルーツ探しの旅路を続けていくのですから、本当に因果はあざなえる縄のごとしと言いますか不思議なご縁を感じます。ちなみにこの佐々木兄弟は母親を通じて源頼朝、源義経、源義仲(木曾義仲)とは従兄弟にあたるそうなので、源氏一族の中で従兄弟同士が戦っていた事にもなります。頼朝と義経も異母兄弟ですし、まさ

に骨肉の争いが多くの悲劇を生んだ戦乱の時代ですね。

余談になりますが、最近読んだ本の中に思いがけず宇多天皇と佐々木高綱が出て来て驚いた事がありました。ちよつと下記に抜粋します。



滋賀県近江八幡市安土町常楽寺にある沙沙貴神社。少彦名命を主祭神として計四座五柱の神々を祀り、「佐佐木大明神」と総称する。佐佐木源氏の氏神であり、佐々木姓発祥地に鎮座する。wikipedia より

「宇多天皇は月読命の調和的みたまであり、佐々木家のご先祖である。近江の沙々貴神社はその本地で、少彦名神の神石と共に宇多天皇を斎祀している。ここにはカガミの舟に乗って少彦名が出雲に来たという伝説を証明するように、カガミの豆がなる木がある。乃木將軍も佐々木の流れであるが、最も仕組みに重要な役をしていたのは、佐々木高綱であった。彼は宇治川の先陣争に勝った喜びをこめて、出雲の国主になつてから玉置神社に釣鐘を奉納している。この釣鐘は世界の終末の時、愈々の時だけ打つ鐘で、他の時に打つてはならぬと伝えられているという。」

〔終末の世の様相と明日への宣言〕(浜本末造著)

この本は昭和に和歌山にいらした神道家の著作です。私は靈感ゼロの人間なので、この内容の真偽は分かりませんが、とても興味深い内容でした。特に「宇多天皇は調和的な御霊を持った天皇だ」というくだりは、世界中の石や植物を調和してエリクサー浄水器を作り、世界中の塩を和合して七五三塩を作り、各地の砂糖を合わせて一二三糖をつくった宮

下会長とも重なって非常に面白く読ませていただきました。

さて、世界の終末の時にだけ打つ事が許されているという釣鐘はまだ玉置神社にあるのでしょうか。元伊勢巡りがひと段落したら、次はご先祖様のニギハヤヒの足跡を辿って和歌山にも旅をしてみたいと思つていましたので、その際は玉置神社にも足を延ばしてみようと思つています。その時は、きっとまたジグソーパズルのピースがはまるように、色々な新事実が分かつてくるのでしょう。

佐々木源氏の活躍

既に何回か名前が出ていている、宮下会長の直系のご先祖である佐々木定綱の弟にあたる**佐々木高綱**は非常に人気のある武将で『平家物語』や『源平盛衰記』にその活躍が描かれ、宇治川の戦いにおける梶原景季との先陣争いで知られています。歌舞伎では『鎌倉三代記』に登場します。その定綱の次男の二郎左衛門尉光綱が出雲国野木に住み、野木(乃木)氏の祖となりました。子孫は出雲佐々木氏を名乗り、やがて明治の

軍人・乃木希典を輩出する事になるのでした。乃木將軍は祖先尊崇の念が極めて強く、高綱ほか佐々木・野木一族の顕彰に力を注いだそうです。そういえば沙々貴神社に「乃木將軍のお言葉の碑」という物が建っていました。

宮下会長の御祖母様は系図からここまで把握していた事になります。明治生まれの方はさすがですね。それこそ祖先尊崇の念が強い御祖母様だったのでしょう。もしかして御祖母様のお気持ち私が私を宮下会長の元に導いたのかもしれない。

さて更にもう少し、宮下会長の直系の佐々木氏の方達の



乃木 希典 (のぎまれすけ、嘉永2年11月11日(1849年12月25日) - 1912年(大正元年)9月13日)は、日本の武士(長府藩士)、陸軍軍人、教育者。日露戦争における旅順攻囲戦の指揮や、明治天皇の後を慕って殉死したことで国際的にも著名である。wikipedia より



沙々貴神社にある「乃木將軍のお言葉」の碑

事績を詳細に記しておきたいと思えます。佐々木家が近江に縁ができたのは、四代目扶義の時のようです。扶義は参議(中納言・藏人・檢非違使)という大臣・納言に次ぐ中央官僚の高官でした。特に弘仁年間(八一〇～八二四年)以降は定員が八名であることから八座とも呼ばれ、太政官の政務審査の構成員であり、勅命の施行をつかさどる重職でした。この扶義が近江守護を任じられ初めて佐々木に住まいしたようです。しかし本格的に佐々木に住むようになるのは次の成頼の時代でした。

五代目成頼の事績としては、「兵庫助 左近将監 式部大夫 従五以下 佐々木に住し、弓箭をとりて六箇国の軍兵これにしたがふ」とあります。臣籍に降りたとはいえ天皇の血筋として都で活躍していた二代目から四代目の方達の事績に比べると、この五代目の成頼から急に勇ましくなったような印象を受けます。そしてその息子の義経は初め章経あきつねと言ひ、「兵部丞 近江守 近江総追捕 従五位下」という近江国の総追捕使に任ぜられています。総追捕使とは、律令体制の衰退にともない、平安時代に諸国の治安維持、警備の



沙沙貴神社

ために設置された職です。

後に起こる動乱の兆しが既にこの頃から見え始めていたのでしょうか。

七代目の経方つねかたは源次大夫、兵庫助を任じられ、沙沙貴神社(佐々木宮)の神職にも就きました。

八代目の季定すえさだは為俊たもとしとも言います。事績は「従五位上・式部大夫であつた」と割ととあつざりと記されているのみです。何となくですが、役職からしても七代目と八代目の方は武官というより文官向きの性質の方達だったように感じます。

九代目の秀義、十代目の定綱になると記載内容が増えてきます。

九代目秀義の幼名は三郎、後に兵部丞と近江総追捕使となつています。十三歳の時に源氏の家督を継いだ伯父・六条判官源為義の養子となりました。そして保元の乱(一一五六年)・平治の乱(一一五九年)では源義朝に従い出陣し活躍します。特に治承四年(一一八〇年)四月の源氏の挙兵では、頼朝を助けて平氏と戦っています。以下倉田氏家譜より一部抜粋します。

「伊豆国は平時忠の知行国であり、平氏一門の有力武士である山本判官兼隆が目代(国府の代理)としており、また平宗盛の知行国である駿河国には、目代、橘遠茂が強勢を誇っていた。このように挙兵した頼朝の周辺は強敵にかこまれており、危機が刻々とせまっていたのである。このとき、頼朝は信頼する岳父北条時政とはかり、八月十七日、三島明神の祭祀に、山木の館の守護の手薄に乗じて、これを奇襲し兼隆の首をあげているのである。この奇襲は頼朝の前途を決定づける、きわめて重大な勝利であつたが、秀義は嫡子定綱

らを引きつれ、真先に掛け参じて戦功をあげたという。しかしさしもの秀義も寿永三年(一一八四年)七月十九日には、伊豆国の合戦で五男の五郎義清と共に平氏を大手搦手より攻撃したが、これを敗ることができず、血戦して九十余人を打ち取りながらもついに力つきて討死しているのである。このように秀義の戦歴はかがやかしいものがあるが、佐々木一族の活躍も目ざましいものがあり、きわめて多彩な存在であつた」

宮下会長のご先祖様である秀義は伊豆でお亡くなりになつていたのでね。比較的我が家から近場でありますので驚きました。

※ただしウイキペディアによると、下記の通り甲賀で亡くなつてます。



佐々木秀義 (1112~1184)



沙沙貴神社にて



『宇治川先陣争図』川底の太綱を切り払いながら進む佐々木高綱

「治承四年（一一八〇年）に源頼朝が伊豆国で平氏打倒の兵を挙げる際、平家の家人大庭景親から頼朝討伐の密事を聞き、子の定綱を使いに出して頼朝に危急を知らせる。定綱、経高、盛綱、高綱を頼朝拳兵に従わせ、その功により本領を安堵され、佐々木荘へと戻る。

元暦元年（一一八四年）七月の三日平氏の乱において、五男義清と共に反乱鎮圧に赴き、平家継・平信兼

らの率いる伊賀・伊勢の平家方残党と甲賀郡上野村で戦い九十余人を討つた後、戦死した。享年七三。死後、その功により近江権守を贈られる」

さて十代目の左衛門尉定綱も父親に劣らない勇将であったそうで、伊豆国では父・秀義に従い兄弟共に源氏の嫡流の頼朝に忠節を尽くして戦いました。ことに頼朝の挙兵の際は、

弟の四郎高綱と共に、はるばる近江国佐々木から駆け付け、堤権守信遠を打ち取りました。また八月二十三日の石橋山の合戦では兄弟四人で活躍し佐々木

一族の名を上げています。定綱は、

翌建久四年（一一九三年）二月二十日には、本知行地の他に七か国において、各一か所の割合で知行を加えられ、その支配は東国から遠く山陰にまでおよびました。知行地の中で隠岐国は全て、長門・石見の両国では守護職に任じられています。そして正妻には北条時政の娘、つまり頼朝の妻である北条政子の妹を娶っている事から、いかに鎌倉幕府からの信頼が厚かったかが分かります。

定綱は正治二年（一二〇〇年）五月九日には、近江国柏原与三郎を誅伐し柏原荘を配下に収め、更に建仁三年（一二〇三年）六月二十四日には阿野法橋全成の子頼全を東山の延

年寺において討ち取っています。さらにこの年は前年十月に祇園社と清水寺の間に境界線争いが発生しているのが広がり、延暦寺と興福寺の衆徒が加担して京都周辺が混乱に陥つたが、この鎮圧にも定綱は功を尽くしました。そして定綱は元久元年（一二〇四年）四月一六日には従五位下に叙任され、その翌年四月一五日に没しました。

このように定綱を筆頭とする佐々木一族は源氏の再興に大きな役割を果たしたのでした。

この定綱の後、佐々木氏の系統は三男信綱が継いでいく事になります。信綱も宇治川の合戦で活躍し、その功により近江国高嶋郡朽木の庄

を賜り、その後は泰綱・頼綱・時信・氏頼・満高・高頼・定頼・義賢と代々栄えていきますが、最後の義賢が織田信長と戦い近江観音寺城で討ち取られ、この系統は滅びてしまいます。司馬遼太郎氏の『梟の城』によると、義賢はかつて甲賀一円の忍者が主と仰いだ旧主だったそうです。やはり土地柄、忍者集団とも少なからず縁があったのですね。

しかしながら、倉田家の系譜に繋がっていくのは弟である十男（八男の説もあり）の頼定の流れです。この十一代頼定の事績は「十郎・法名慈願・山中を称す」とのみあるだけで詳細な事は伝わっていないようです。分流となった頼定は山中姓を名乗る事となり、山中十郎頼定・山中四郎泰定・山中次郎基定・山中四郎泰基・山中三郎左衛門清定・山中四郎定俊・山中三郎綱定・山中内記定為と続き、この定為が倉田氏の始祖となったのです。

山中氏と言えば、宮下会長をお連れした、日野町の歴史民俗資料館「近江日野商人館」（旧山中兵右衛門邸）を思い浮かべます。もしかしてこの日野商人の山中家も同族かもしれま

せん。

甲賀忍びの社会では、甲賀郷の主だった家を総称して甲賀五十三家と言ったそうですが、正徳年間の甲賀衆芥川家の日記に記されている戦国初期の五十三家の筆頭に山中十郎と記されているそうです。日記には青木筑前守、嵯峨越前守と記されているので甲賀五十三家とは武士でありました。

もしかして十一代頼定さんは甲賀の山の中に住まいしたので、山中姓を名乗る事になったのかもれしませんね。

そして倉田姓を賜った、定為の孫である為実が会津に移住し会津倉田家の始祖となるのです。ようやく宇多天皇から佐々木源氏、山中氏を経て倉田家に戻ってきたような気がします。

再び纏めとして超省略して記しますと、宇多天皇から始まる宮下会長の母方の系譜は、宇多天皇の皇子が臣籍に降下し、平



宮下会長の祖母、蔵田秀子と母、智恵子。蔵田喜芳園にて1960年頃か。

安中期に佐々木兵庫介成頼が近江国に移住し、佐々木氏を名乗り始める。以後十郎頼定の時に分家となり山中に改称、さらに室町時代において、山中内記定為が將軍の命によって倉田と改め、戦国時代に倉田新右衛門為実が会津に移住して行く。そこで大庄屋として江戸時代を過ごし幕末を迎え、大正七年に宮下会長の曾祖父・喜芳氏と祖母・秀子様は北海道の札幌に移住して「蔵田喜芳園」という老舗造園を開くという壮大な流れになっていたのでした。

先日、宮下会長はこう述べられました。「佐々木兄弟で、弟高綱の兄定綱が後の倉田家の祖となったのです。その定綱の次男光綱が乃木家の

祖となり、長州藩の乃木希典と会津藩の倉田為實、子孫が後々敵対関係になりました。また私の父方の先祖である宮下家は山梨県富士吉田市明見村になりますが、「富士古文書（宮下文献）」を伝承していたために、鎌倉・徳川幕府から軋轢を受け、一方母方の倉田家は会津藩として徳川幕府の後ろ盾として仕えていたという事ですね。高綱と義伸のように、祖先は同じでも後々辿る運命は敵陣として対せねばなくなる不思議な縁生が世の常なのでしょうか。

しかし、つまるところ世の敵味方元より同根なのです。世界は一家なのです。」と。

まったくその通りだと思いましたし、さすが調和の御霊をお持ちの方だと感じいました。（続く）

●著者プロフィール

大橋 しのぶ

寺田本家 23 代目当主故・寺田啓佐さんとの出会いにより、蔵の微生物をテーマにした小説を書き、小冊子を発行することに。ペンネームで発表した小冊子作品は 5 作になる。2015 年、まほろば会長宮下周平と共にルーツ探しの旅の案内人として同行。神奈川県在住。